
第百三話

頼光朝臣瑞夢事付周文王事

『前太平記』上 卷第一 二十四頁より

〔頼光郎従に四傑を望む〕

上総守源頼光朝臣は、過ぎ去ったところから当国に着任して、国務を執り行い種々の訴訟に判決をお下しになるが、民衆がその変化に従うことは流れに従う水のように（に当然のこと）だ。頼光はよくよくお思いになっていたことは、「だいたい国を治める天下の武将である者はふさわしい郎従を力添えにしないはずがない。なんといっても私の父の満仲朝臣も、正治、仲光、季国、光雅の四人の家来によって、国を治め天下を穏やかにする功績をお成し遂げになる。私もまた渡部・卜部の二人の豪傑の上に、さらにもう二人を加えるならば、天下のことにおいて何か恐れるものがあるだろうか」と、いつもこのことだけを考えてお暮しになる。

〔頼光の瑞夢〕

こうして年号が移り変わって、天延三年十月二十三日の朝早く、綱と季武をお呼びして仰ったことは、「さて、今宵（私は）不思議なお告げの夢を見る。その内容

を具体的に言うならば、信濃国の碓氷峠と思われる所に行って猟をしていたのだったが、日が落ちて夕景色になるまで、一つも獲物がない。狩り子（狩りの時に鳥獣

日晩景に及ぶまで

を駆り立てたり、逃げるのを防いだりする人夫) を連れて、空のまま帰ろうとする。その時、ある山の峰から猪が一匹出てくるのを、頼光がとびかかって組み敷き、開いた土地にたった二本の刀に刺し止めて、引き揚げてみると、猪は胴体だけあって、足はない。偶然手にした物は、四足が十分にそろっていないことに、私の

其支体の具はらざる事、

気分はよくはなかった。こんな状態だったところに、衣冠が整っている不思議な人が突然現れて、頼光に向かっておっしゃることは、『お前が獲ったものには、腹と胸があるといっても、まだ腿と肘はない。こういうわけでお前に与える』といて、例の猪の腿と肘をお与えになる。頼光は格別に喜び、ふと思って聞いていうことには『あなたはどういう人だ』。不思議な人のいうことには、『私は信濃国のものである』と仰ったと思うと、そのまま夢は覚めてしまった。これは吉事と凶事どちらなのだろうか」と、お語りだしになってので、聞いた二人は、「このような素晴らしいお夢はございません。昔、周の文王は猟をなさる。史編が占って言ったことには『獲ったものは竜や蛟、虎、熊などの四猛獣ではない。天子に、師を贈ったのである』と申し上げたが、案の定太公望を手に入れなされた。今夜のお夢、これはすべて天が忠臣を降し、貴方に与えるお告げであろう」と、言葉をそろえて申

し上げところ、頼光はそれをお聞きになって、「これは私がいつも望んでいたことだ。なるほど、腹と胸があったことは、今はお前たちのことであろう。この上に、また腿と肘といえる二人の臣下を加えるならば、長年の望みがきっと満ち足りるだろう」と、仰ったのだった。

[太公望の故事]

さて、周の文王と申し上げる者は、后稷の十二代目の孫で、西周に都をご造営になり、西伯晶とって、まだ諸侯王でいらっしやった。その時の帝は殷の湯王から二十八代後の紂王とって、その性質は荒みみだらで忠告を断り、酒を好んで女に

其性荒淫にして諫めを拒ぎ、酒を嗜み色に耽る。

溺れる。有蘇氏(魯)の国から妲己という美人を娶って、たいそうこれを可愛がり、勝手気ままにみだらな行いをして、自分を非難する人間を罰する。朝廷の政務もつい

肆に淫乱を行ない、己を諂る者を罪す。

に衰え、悪行は一層ひどくなり、天下の民は皆憎み、恨まないというものはいない。ところが、文王はずっと才知ある臣下を持って、救世安民の政治を執り行うことだけをご希望になっていた。文王が外に出て狩りをしようとしなさる。一般的に

凡そ

貴人が外に出る時は、必ず役人に行く場所を言いつける。太史はその吉兆を占う。

大人出づる時は、

必ず有司に之く攸を命ず。

そうすると、太史の役職であった史編という者が占って、その兆候を把握して言うことには、「貴方は渭の川の北側で猟をなさったならば、きっと大きな獲物があるだろう。その得るものは、竜ではなく、蛟でもなく、虎や熊でもない。この兆しは家臣を得るものだろう。これはつまり天下から貴方に師を与えるのである。その人を登用するならば、きっと貴方を助け民衆のための善政を敷き、堯、舜、禹の三代に引けを取らない（いい国を作ることが出来る）だろう」と占った。文王は仰った。「それは私がいつも欲しいと思っていたものである。占いの良い兆しははたしてうまくこのようになるだろうか」。史編はそれに答えて申し上げることは、「私の祖先の史疇という者は、禹王のために占って皐陶を得た。今の兆しは、このことと同じだ。だから、今回もきっとその人を得るはずだ」。文王はたいそうお喜びになって、すぐに沐浴をして身を清め、葷酒を禁じ、習慣を変え、物忌みを三日行って、田車に乗り、田馬にそれを引かせ、渭の川の北側で狩りをなさる。さて、そこ

田車に乗り、

田馬に賀し、

渭浜の陽（きた）に田し給ふ。

で太公望と申し上げた者は姓は姜、名は尚、字は子牙といった。いつも渭の川の北に隠れ住み、茅に座り釣り糸を浜にたらし、魚釣りを楽しんで数年を過ごしていた。文王はそこに到着し、ご覧になるとその姿の威勢がひどく普通と変わっていることに疑うことなく史編の占った者であると、急いで車から降りて丁寧に疲れをね

ぎらって、問うように言うことには、「貴方も魚を取ることを楽しんでいるのだろうか」。太公望が言うことには、「君子の志は天下にある。その志を保つ心を得る

「君子の志は天下に在り。 其存する所の心を得る

ことを楽しみとしている。卑しいものの志は民間の中にある。それを行うことを楽

事を楽しむ。 小人の志は草莽に在り。 其行なふ所の事を得る事を楽しむ。

しむ。君子と卑しいものの差はあるといっても、今私の魚を取る楽しみは、非常に

君子小人の分有りとも、 今吾が魚を捕る、楽しむ所は 甚だ

二つに似ていることだ」。文王の言うことには「どこに似ているところがあるとい

相似たること有り」

うのか」。太公望が言うことには「釣りは卑しいものごとといっても、その

「釣りは小人の一事なりと云へども、

中にもまた三つほどの方法がある。一つには褒美など。餌をもって魚を引く。これ

其中にも亦三等の術有り。 一つには禄等。 餌の、以て魚を引く、

はつまり、褒美によって賢人を引き入れるのと似ている。二つ目は死など。魚は餌

是則ち 禄を以て士を引くに似たり。 二つには死等。魚餌に死す、

に死ぬ。これはつまり賢人が褒美により死ぬことに似ている。三つ目に役職など。

是則ち士の禄に死するに似たり。 三つには官等。

魚は餌のために寄ってくる。これはつまり、賢人が役職のために来るのと似てい

魚、餌の為に来たる、 是則ち 士の官の為に来たるに似たり。

る。そもそも釣りは得ることを求めることが所以。つまり、得ることは、魚だけで

夫 釣りは得ることを求むる所以。 即ち 得る所、魚に過ぎざるのみ。

はない。それでいて、その情深いところはこのようなことだ。天下のことより大き

然も 其情深き事此の如し。 天下の事、此より大なる

なものはあるだろうか。言うまでなく、君子の志はその上さらにこれより大きなも

者有らんや。 況んや 君子の志す所、更に是より大なる者有らんや。

のはあるだろうか。漁によって、天下の楽しみを釣る。釣りのことといっても、

漁を以て、 天下の楽しみを釣る。 釣りの一事と雖も、

その偉大さはこのようなことなのだ」。文王が再びその情け深さを聞く。太公望が

其大ひなる事此の如し」

答えて言うことには、「水源が深いと、水は流れて止まることはない。水は流れて

「源深ふして 水流れて息まず。 水流れて

止まらずにして、魚を生む。これは自然のことである。木の根は深いと、枝葉は長

息まずして魚を生ず。 此至情なり。 根深ふして 枝葉長盛す。

く育つ。枝葉が長く育ち、木の実を結ぶ。これは自然なことである。君子の情けと

枝葉長盛して菓を結ぶ。

此至情なり。

君子の情、

は、互いにともにいる時は自然に大切に思い合う。互いに大切に思い合って、役目

相同じときは、

自然に親しみ相合ふ。

親しみ相合って、

事業

は自然に上手くいく。これは自然なことである。情けは人の性質の現れるところ

自然に生発す。

此至情なり。

情は性の発する所、

で、言葉を交わすことはすべて心を彩ることである。今、私は、自然なことを言っ

言語応対は皆情の文飾なり。

今吾、

君に至情を言っ

て、彩をうわべ作らないのは、たった今のことがこの上ないことといっても、単に

文飾を仮ざるは、

乃い事理の至極なりと雖も、

普通のことだけを言って、その上に、この言葉に慎むところがない。あなたはそん

唯至情をのみ言っ

然も詞に忌み憚る所無し。

君其

な私を嫌だとは思わないのか」。文王が言うことには、「人徳の人とは貴方という

吾を憎まんか」

「仁徳の、人に君たる事、

人のこと。よく正論を述べ、いさめることを受け入れて、自然なこととも嫌とは思わ

能く正諫を容れ受けて、

至情を憎まず。

ない。私は不都合だといっても、どうしてそのように思うのだ」。太公望が言うこ

吾不敏なりと雖も、

何為れぞ其然らん」

とには「私はさらに自然なことを持って貴方に授けよう。さて、釣りをするために

「吾尚至情を以て君に献ぜん。夫 釣りするに、

糸はとても微細であるので、餌もまたはつきりしている。魚の小さいものは、これ

絲微細なれば 餌も亦明顕なり。 魚の小なる者 之を

を食べる。それは少ない俸禄で、小臣を繋ぎ止めることに例える。その糸はしっか

食る。 微禄を以て 小臣を繋ぐに喩ふ。 其絲稠密なれば

り編み込まれているので、その餌もまた良い香りを発す。魚の中くらいのものはこ

其餌も亦馨香なり。 魚の中なる者、

れを食べる。中くらいの俸禄で、普通の人をもたらすことに例える。糸が確かに大

之を食らふ。 中禄を以て 中人を致すに喩ふ。 絲既に隆大なれば

きいと、餌もまた豊かで大きい。魚の大きいものはこれを食べる。たくさんの俸禄

餌も亦豊厚なり。 魚の大ひなる者、之を食らふ。 重禄を以て

を持って、聖人を手に入れることに例える。魚が餌を食べる。今、釣り糸につられ

大賢を得るに喩ふ。 魚の餌を食らふ、 乃い 緝に率かれて

て逃げる事が出来ない。人の俸禄を食らう。今、貴方に服従させられて、決して

脱るゝことを得ず。 人の禄を食らふ、 乃い 君に服せられて 敢へて

去ることはない。だから、香ばしい餌で魚を取る。魚を殺して食べることが出来

去らず。 故に 香餌を以て魚を取る。 魚は殺して之を食らふべし。

る。 爵位と俸禄のために人を得る。 人は精いっぱい努力して、人を登用するべき

爵禄を以て人を取る。 人は尽くして 之を用ふべし。

だ。 家のために、人の国を打ち取る時は、すぐにその国の人を保つのがよい。 国の

家を以て 人の国を取るときは、 則ち其国之を有つべし。 国を以て

ために、人が天下を取る時は、たちまち天下の残らずすべての人をきつと従わせて

人の天下を取るときは、 則ち天下尽く之を服しつべし。

しまうだろう。 それでいて、天下は一人の天下ではない。 これこそ、天下の中の天

然も 天下は一人の天下に非ず。 乃ひ 天下の天下なり。

下である。 天下の勝利を同じ瞬間に行う者は、天下を得る。 天下の利を独り占めに

天下の利を同じふする者は 天下を得。 天下の利を擅にする者は

する者は、天下を失う。 天には時があり、地には財産がある。 よく人と時と財産を

天下を失ふ。 天に時有り、 地に財有り。 能く人と之を共にする者は

手にする者は、仁君である。 仁君のいるところに、天下はこれに帰着する。 人を死

仁なり。 仁の在る所、 天下之に帰す。 人の死を

から救い、人を困難から解放し、人を災いから救い、人を危機から救うことは立派

免し、 人の難きを解き、 人の患いを救ひ、 人の急を濟ふは徳なり。

な行いである。 徳のある所に、天下はこれに帰着する。 人と悲しみを共有し、人と

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

徳の在る所、 天下之帰す。 人と憂ひを同じふし、

楽しみを共有し、人と好みを共有し、人と憎悪を共有する者は、人の義である。義

楽しみを同じふし、 好みを同じふし、 悪みを同じふする者は 義なり。 義の

のある所に天下はこれに帰着する。一般的に死を恐れ、生きることを楽しむ。徳を

在る所、天下之に赴く。 凡そ人、死を悪んで 生を楽しむ。 徳を

好んで、利に帰着する。生を満喫し、利を十分にする者は、道である。道のある所

好んで 利に帰す。 生を能くし、 利を能くする者は 道なり。 道の在る所、

に、天下はこれに帰着する」。その時、文王は太公望に二度続けて頭を下げて、

天下之に帰す」

「真実であることよ、先生のお言葉は。つまり、これは天が私に詔を降すことである。私は才知に乏しいが、進んで天の詔を受けないことがあるだろうか」といつて、すぐにお車の右に太公望をのせて、ご一緒に都にお帰りになり、文王はこの人を師となさる。

[頼光、瑞夢の意味]

そうして、太公望の目論見によって、文王の徳行で仁を施しなされたので、御子武王の世になって、天下の民草は皆、紂王の非道を憎み、周に帰着したので、武王はついに天下を取り、子孫は長く八百年間続いたのだった。これは文王が渭の川で

狩りをして、太公望を得て、穏やかに天下に徳をお施しになるためのものだった。
それゆえ、頼光朝臣のそのような夢のお告げがあることは、要するに、いい家臣を
お手に入れになって、天下の武将とおなりになるはずの前兆であろうと、皆頼もし
く感じたのだった。

注釈

※壺・有蘇氏……姐己の出た家。紂王は有蘇氏を討ったことで姐己を得たという。

今回は全体的に駄訳すぎて申し訳ありません…。最後まで、初回更新でこの話は載せるかどうかは迷ったの
ですが、次につながるためにはなくてはならなかった話でしたので掲載しました。いつか必ず直して再更新し
ます…。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3
海熊童子